# 後拾遺和歌集　上

七

和書門　類
二七〇七四號
一一一函
一三架
五六冊

内閣文庫
和書　類
二七〇七四號
五六冊
二〇函
三架

内閣文庫

| | | |
|---|---|---|
| 番號 | 和 | 27074 |
| 冊數 | 56 ( | 7) |
| 函號 | 200 | 5 |

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

明治〔十〕二年購求

# 後拾遺和歌集序

わか君あめのしたしろしめしてよりこのかたよつの
海波のこゑきこえすこゝのつの國みつきたえす
ゆく事なし[illegible]よそ田のうらふくこゝろのちと
まさなからうらなるは花乃香月の秋[illegible]
ことのはそむかしにくらへてなんおこりはす
あれはてたりしをひろくきく人月にのみさ
たち風にあはさる事すくなくて花をもてあそひ
鳥をおもはれまさる事なし御かよひの
わかうたよりしまさしく[illegible]あまたのあつめさせ事

かの拾遺集よりこなたいまのよのおかしきことのは
もしほ草かきあつむへきよしをなんおほせ
をうけたまはりて[illegible]
[illegible]
[illegible]
事なき[illegible]の春梅よりまさるなる應徳の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

乃うこふはいゆゝきこし古今後撰拾遺集よ
のそくいとやしのこと葉そのかり乃こと秋の山の
もみちなくあしたの霜乃さえわかれかたく
こゝろとゝめてやまふかく乃ことなれ
そわらえておほうまへさしおり天暦の末より今
てらもとく世は十つきさまかはりてとしせ
あまりみそちよなりにける人のこと佳吉の松はさく
はなさきのちりすきて海のはまのまさこのちりつもる
おほく家々の言のくおほくつもりにけり
くゝ滋みちもへふかき風のしけれ

かまれとなりぬるを北山の名やしまよえるみえし
おとろへすなれる風月のおもてをまもりことし春乃
花のあしたひおろかとそむきちらさつゝさとあまね
やとりをえていくゆきてまれもとわかなつ家て後拾
遺和謌集といふおほよそ古今後撰乃
集にいれるうたをはこれをのそきたりその家乃集をもちよりて
また今あわれてなまひさにあらさる絶え
とりいそきかれわれこれよのみもれてわたりいと
つゝ乃ふ風ひとつひとこゝろえてうた人なかなえ
おほやけのかゝ大中臣能宣清原元輔源順紀時

文治上覚城等これハみかとさゝかのかゝみとえら
れ給ふのちよりて宋朝のつかひわたされあらん今なりし
これ乃今のことし城京ふるとしてならのよのさら城
あめ乃母子もかゝよりてあるまりてめすつさいかゝ子かと云
これあるよふあらん今ことくとかきもしかりてあるへと
とやしとならさとこれかたてちよみよの宗みか
ひとさらしきしともかくかんあらん今こき志のうかれとのち
みんたのよの間よりもとふひかあるさん今中あな
のつさしあんつさよりこ乃集とえてかこ乃事
かよよへつさよね(つ)よりは乃みハ万葉集

廿巻あとえていあつかれのとえおそひとまはしかくい
かの集乃さらくはやらし事城かくつかうこと志と
わるも世わそのこともの世にいよふふあかるへ人きく
またへつとかはあやりし延喜乃ひりものみとお談
集あかりのひるさ廿巻とえていくよそへて今給
いうゆへいもの古今和歌集これるかしとかへ乃
おここおかりよりむまさ古今和歌集よりつさは
こゝに廿巻をえていりそて後撰集とよつひまさ
花山乃法皇乃御されやまさ川乃集よりつゝらてもと
さわひらのへ拾遺集となつ宗絵へかかう乃みえ

集はしらえぬとのこゝろなくしてしるへくもあらはし
かしこのかみ大納言公任卿みちかきよのことのはを
人の歌ぬきいてゝこれはこれ之かう新らちあかまへ
いたらとかきていつまさとをおもひけるをひのこく
わかせくけのかくへあら志ぬらうよあつ源やまと路
られとよりさきとふさまりえいひくかくらぬをよ
よろつくへの心歌ゆかえしまことのしらのやまと
うた歌えいひく人をうらしつ歌のよらうみつるうたを
あさ歌あつめくかうたゆかりよをかつくる集とちう満
もつかしきもしえれゆうちをらをまつくれらそるらかきこさ

えらひていてよねの世の集とする事ありけるまことに
なかめあらそひけくそのこゝたなきはおかりよおかりけう
このむしくされ集いふしこれもやしなふしたりけむ
ちかきらうち式しりをわけくれの心をやわたりちら
とせ方とて宇治集にみちらかく能因法師とりてまおわお
心花の山花おもとをらひくちところ人よ志てれあかわ
わらよよあひてしあひらるへのこゝとをえてひく説
集となるなかにくしもの後集はすがたさかそ応
あはのさくかいしてかあるしにすゝとぬきさう門宮
みもすのふされてこの集よのまゝつてはとみえるりさき

花の集といひわしひなよ風山ゐしの志りよえかりしなら
ときうへに風ありとの集といひあつめくる云乃をやし
くらかつきすえんくらえ風あはこれくはくひかされは
すまひしとも志つ染まくくるのえてこゝろしつきひ
らうるすたなとつ山川のなすれをみくみえるみそ
ゆりくこれのうち風とも志紙のそみていう風の
うへきこと志つさらつしとも志られこれくの集より
のせくらか哥かみつ出しし作出つらのみかよ志
こゝろねをとかる乃すかめしたまのましきれかけ
あれにさしあらめへきこゝはとこちくの様お

こゑりらよゑんつあつさなりたる乃くもゐにひく
のおかせそむきかくしてらくみわの世さ風ち
かわなりく我くのそこゝ事あわこの集りて
せり川おかひうちとかんかわるくちよおわよりそこ部
の詞かえくよ河くこ乃も海中ふよをかうのりしこ
みをのおちくても志ほなのをねみさかもつめそ石
このこの家くあれとも是れ木のくれにるえ石おゝ
かくしさま風そつるんはそ何しにもあわ欲号へく
きぬれとも名を白らをあともうされたいかへしつ海
とおさけわらんとを紙ゆくやも悪をもつさん事

とかりひとえてつるさしさかあきいさしへならむ
たゝ風のまよふらむかたにひとふかくなまめき
はな露ちりしくふきこえさせたまへるもよしあるわたりを
あのねのなかれ秋の夜つくえねのつくくと事きぬの
おもひみえてわつみとせりのかわぬれしなむきこえ
のちみれくなあさつきよのひのこゝろちりたえてい
とかわおちあてよなんあわれきらとつゝり

後拾遺和歌集第一

春上

正月一日よみ侍りける　小大君

いかにねておくるあしたにいふことそきのふをこそとけふをことしと

みちのくに侍りけるころ春たつ日よみ侍りける　光朝法師母

いそみつゝまた霞もたちみえぬ見ゆる春やわかあくとこそきけ

春は東よりきたるといふ心をよみ侍りける　源師賢朝臣

東ちはなこその関もあるものをいかてか春のこえてきつらん

春たつ日よみ侍りける　橘俊綱朝臣

あふ坂の関をや春もこえつらんおとはの山のけさはかすめる

寛和二年花山院歌合によみ侍りける　大中臣能宣朝臣

春のくる道のしるへはみよしのゝ山にたなひく霞なりけり

としころ山寺に侍りけるころよみ侍りける

とくのことひく侍りけるによめる

人はいさねぬと思ひしもかく年も山にてゆきにけるかな

山寺に雪のふれるをよめる　　平兼盛

雪ふりて道ふみまよふ山里にいかにしてかは春のきつらん

題しらす　　加賀左衛門

わきてこそ春は風も見えねとも年のこなたに霞む色かな

天暦三年太政大臣の七十賀し侍ける屏風によめる

大中臣能宣朝臣

ち年まてかきれる松もけふよりは君にひかれてよろつ代やへん

一条院の御時殿上人春の歌とてこひ侍けれ

はへりけれは　　紫式部

みよし野は春のけしきにかすめとも結ほゝれたる雪の下草

花山院の歌合にかすみをよみ侍ける　　藤原長能

吉川の水はまたきえなくにあさ霞峯にたちてみゆるやまもと

題しらす　　藤原隆経朝臣

春きてもあの一風のさきのこゝぬ桜霞やたちかへるらん

和泉式部

春霞たつやおそきと山川の岩間をくゝる音きこゆなり

鷹司殿の七十賀の月次屏風に臨時客

のきゆくところをよめる
赤染衛門
むらさきの袖をつらねてきつるかな春立ことはこれそうれしき
春臨時客をよめる
小辨
むれてくる大宮人は春をへてかはらぬものはかさしなりけり
入道前太政大臣大饗し侍ける屏風に臨時
客のかたかきたるところによめる
藤原輔尹朝臣
ひきつれてけふはねのひの松にまたいま千とせをそのへにきつる

おなし屏風に大饗のところかきたるところに
ありける
入道前太政大臣
春日野にわかなつむ使にや野辺のこまつをわかなつみける
民部卿泰憲近江守にて侍りける時三井寺にて
歌合し侍りけるによめる
よみ人不知
春はなほ白雪と鶯花ちらぬとやいつくなるらん
ときはゝはなるゝ人侍らん
大中臣能宣朝臣
山たかみ雪ふるすにも鶯の出るはつねはけふそきこゆる

正月二日あふさかにてうくひすのこゑをききて
よみ侍ける　源兼澄
ふるさとへ行人あらはことつてむけふ鶯のはつねききつと
選子内親王いつきときこえける時正月三日人々
あまためしてさけたまひけるに梅の花をさかつきに
ひとへたてまつるとて内よりかはらけとりてよめる
侍ける　よみ人しらす
わかやとに霜さえかへる山里に春をしらせて鶯のなく
かつはいかてきゝてまつらむけふよりはうくひすの声
今日よりはなくらむ

清原元輔
鶯のねかやとにもくるとしもいまはのやとに春の
後徳大寺の家にて春山里にまつといふことを
よみ侍ける　藤原範永朝臣
ふるさとの霞とちこめぬまに（？）あはれなる山の鶯
小野宮太政大臣の家にて子日し侍けるに
よみ侍ける　清原元輔
千年へんやとの子日の松をけふひくかことにあらは又
まかりしてよみ侍ける　和泉式部
ひきつれてけふ子日の松にまた今はちとせそ野へにある

二月子日庭にをりたちて松ひきてあそびけり
いかゞ侍らむ紙みくよみ
よみ人しらず
春乃野に出ぬ子日は今日にしてかくてやかましその千代
二月子日にあたりて侍るに良暹法師
乃りとよみ子日云りきし又さかしと云
よそに在侍りけるによませけるとしも白れ
みきれはよみて候ひつるにきこれ
賀茂成助
きのふ意いるも野へに子日して今日またこゝろつかなみ

今上六条にありける上達部あまたの子日に
としもかくしもかく疾よまむとわくる子日侍らん
よみ侍りける　太大臣小弁
袖ひけばひきまほしき松原のそれともしらぬ千代をきさいに
三条院御時に上達部殿上人今日子日せさせ給
侍りけるに新院の女房かずさとかやいふ人して
こひうちとらるまかりにて松乃つとあまた新院
よみてまつり侍ける
堀河右大臣
二葉わけ子日の松をとくからはかぎりしらぬを幾よへむ

題しらす　　　　民部卿經信

あさみとり野への霞のたなひくにけふの小松をまかせつるかな

萬暦二年内裏歌合によみ侍りける

大中臣輔賢

千代のいろみてよみえ子日する松の千年をかそへぬるかな

正月七日子日にあたりて雪のふりけれは

よめる

伊勢大輔

今日みれは野邊の小松をひきつれてちよのはしめに雪やつもれる

正月七日卯日にあたりて侍りけるによめる

うつゑつきあやしと道宗朝臣のもとより

いはひとこせ侍りけれはよめる

よろつよをつゑにきりてもさくら君かちとせの山をはしめつ

題しらす

大中臣能宣朝臣

白雪のまたふるさとのかすかのにいさうちはらひて若菜摘えん

和泉式部

春日野は雪のみつむとみしかともおひ出るものは若菜なりけり

後冷泉院御時后の宮の歌合によみ侍りける

中原頼成妻

摘よろゝ若菜ともにもかはらぬはわか身にかゝれるかなしさ

正月七日ゑんさうの内侍のもとにつかはし
ける　　藤三位
かそしら汲よわかなもけふは鶯のまたなかぬまに人にしらすな
長樂寺にてふるさとの霞といふ心をよみ侍る
大江正言
山たかみ都の春を見わたせはたゝ一むらの霞なりけり
能因法師
今朝は露さへかゝるはるやこの春をみる(ら)ん
題しらす　　選子内親王
春はまつ霞のうちに山里をこちくるそらのきりかは
ちるまかへといふ糸よ綱ひくとこそてよめ(る)
ける　　藤原節信
ちるとやへの塩ならよそくわたる世のあはれなる
題しらす　　曾祢好忠
なにはえのみつもる若のつゑみれは春めきにけり
正月はかり津の國に侍りけるころ人のもとにいひつかはしける　　能因法師
心あらん人にみせはや津の國のなにはわたりの春のけしきを

難波かた汐風に浪あらて津のくに若葉おほえてなんこゝ
春乃こゝち哉とよめる
権僧正静意
わかつのすゝろに露けき（かのえけイ）のくさかくつなく駒いさむらし
長久二年弘徽殿女御歌合し侍りけるに春
駒をよめる　源兼長
あらかの谷おかのへの春駒はとれかけとや友とよふらん
屏風の絵にゆきてさしおかれたるまきの
眺めともなるをよめる
藤原長能
かはくにもなりてみましかはさとにのみ有風をさきにさくら散ぬれは
きえつくしけり　和泉式部
秋まての命もしらす春の野に萩のふるえ（ねイ）をやくとやくらむ
後冷泉院御時后宮乃歌合に残雪
をよめる　藤原範永朝臣
花とみておらんとすれは難波江の芦の若葉にふれる白雪
屏風の絵にむめの花ある家にまらうときたる
所をよめる　平兼盛
梅の香をたよりの風や吹つらん春めつらしく君かきませる

なにこころあれはさむらはむかへとよめる

大中臣能宣朝臣

梅花にほふあたりの夕暮はあやなく人にあやまたれつゝ

春の夜のやみはあやなしといふ事をよめる

梅なる　前大納言公任

春の夜のやみにしあれはにほひくる梅よりほかの花なかりけり

題しらす　大江嘉言

むめのくもゐのあらしに吹あへす梅かゝのあたり待

村上御時前栽ほりこうきてんの女蔵人とよふ

すへさせたまひけるにかくよめる

清原元輔

梅の花かはことことににほはねとうすくこくこそ色は咲けれ

山さとにすみ侍りけるころ梅をよめる

よみ人しらす

我やとのかきねの梅のうつりかに独寝もせぬ心ちこそすれ

題しらす　前大納言公任

ふるやとのかきねの梅のさかりなるをりふしにあふ袖そにほへる

和泉式部

春はたゝ我やとにのみ梅さかはかれにし人も見にときなまし

山家梅花をよめる

賀茂成助

梅花垣ねに匂ふ山さとは行かふ人の心をそみる

春風夜芳といふことをよみ侍ける

藤原顕綱朝臣

むめの花かはかりにほふ春の夜のやみは風こそうれしかりけれ

梅花をよみ侍ける

素意法師

むめかゝをたよりの風や吹つらん春めつらしく君かきませる

大宮太后宮東三条にて后にたゝせ給ひ

ところに家の梅をとりつくらせける花のさかりに

志らぬよすかにていとおもしろくさきたるを

えたにむすひつけ侍ける

弁乳母

かつわかぬ梅にあらねとわれにしも梅花さく川の垣ねを思ひやるかな

大江嘉言

わか宿にうゑぬはかりそ梅花あるしなりともかはかりそみん

清基法師

風ふけはをちの垣ねの梅花かはわかやとのものにそありける

道雅三位の八条の家の障子に人の家ありて

むめの木あるところにまかりて客人きたる

述懐の心をよみ侍ける　　藤原経衡

さそふらん風にも梅のにほひさへ水にうつれるかげぞさくらん

水邊梅花といふことを　　平経章朝臣

もろともにちるもてさへやうつるらん梅の花川水のながれに

長楽寺にすみ侍ける比二月ばかりに人のもとにいひつかはしける　　上東門院中将

おもひやれかすみこめたる山里に花まつほどの春のつれづれ

苗代をよめる　　小弁

かねてより秋とみましを山田にも又打かへす春ぞきにける

帰雁をよめる　　赤染衛門

出るより雲井をさしてかへる雁秋も又こそ来てもなくらめ

藤原道信朝臣

行かへる旅にとしふるかりがねはいくその春をよそにみるらん

馬内侍

こゝまでに見てしを花のさかりをば見すてゝかへる雁

津守国基

うすずみにかく玉章とみゆるかなかすめる空にかへるかりがね

辨乳母

なかしとおもひつゝみちとせまて今の花の盛よせつわかなん

屏風に二月山田うつところかきたるかはりに
所とよみ侍りける

大中臣能宣

かはねてしゝのつかなる小山田のなはしろ水のひかれしかなん

天徳四年内裏哥合にやなきをよめる

坂上望城

あま風にしたかひつゝも青柳のいとゝみたれてゆきゝ
やみまよふいろのみとりとふかきをやみそとらかん

藤原經衡

池水のみくさもとらて青柳のはらふしつえにまかせてそ見る

題しらす　藤原元真

あさみとりみたれてなひく青柳の色にそ春の風もみえける

二月はかりに良暹法師のもとにいひやるとて

つれつれとおもへはかなし花みてよおもひそね
ときとても此ともつきたなふとも見えとも折ひあ
わかよ川ありつきそ

藤原孝善

春のすゑつかた山の藤まておりひもとなきゆくゆゑ

人々花見にまかりけるをかくとしつけ侍らさりけれは
きゝてつかはしける　　藤原隆経朝臣
出てこそ見む山の道をしてつれもなく人の心そかはりける
二月のころほひ花見にまかりて俊綱朝臣の伏見の
家にて人々まかりたりけるにおそく参りてさし
花かさかく侍りける
皇后宮美作
うら山しつみ見る花もかつちりてちらぬ嵐の花のまよひぬる
花見んとおもひかけつるさくら野をやましひをかくれ
見よかし侍りける

賀茂成助
小萩さく秋まてあらは思ひ出よさかのをやきし春はその日と
堂いりし頃　　永源法師
ふくるもまつちらすはかむさしかりつる花を風はうつろはし
中原致時
しらかはの桜のもとみちやあさく柳のえたにはさきてけるかな
橘元任
咲やとも山のゝ山さくらこれかれともなし今日ひらけり
一条院御時殿上人々花見にまかりておくりける
あらしける

源雅通朝臣

折はをし折てはいかゝ山さくらけふをすくさす君にみせなく

返し　盛少将

あくまてかへすよる山桜風よりさきにたつねこそあいと

後冷泉院御時うへのをのこども花見にまかりて

こかしらのかへてゝいふかろらの川ことあそて

まかりて侍りける

一宮駿河

思ひやるかはかなさる花ゟらめ人にしるもなきかな

今上乃御時殿上の人々花見にまかりいてける

故中宮の御前にて人々によみ侍り

けるに　右大臣小弁

あくかれてわかゝ山さくらゝめ人にあはぬくらはやか

障子絵に花おほかる山里に女あるところを

よみ侍る　源道隆

今そしるほとゝを人の折すとも花の盛をまたくさゝぬ命

題しらす　祭主輔親

なかれてもわかまて都も山桜ゐつゝぬえてあらそひ

菅原為言

月満ちて春はいつもゝ花よりも人のあかぬ時そなき

こゝろにも花をあかぬとふかく心ありてよめる

小辨

山櫻風のまにまにちりぬればこそ道のべもしら雪ぞふる

長樂寺に侍りける比花山院より山ざと櫻は
いつよりもあはれになむと申し侍りける

上東門院中將

ありそめて花の家こそあはれなれあかねばとまる山ざくらかな

白川院にて花を見てよみ侍りける

民部卿長家

春ごとにまたきてや見む白川の關もかひなく花はちりけり

又南殿櫻

高岳頼言

見る折に花はちりぬるのどけさに雲ゐにのみ人まてといひ
しか許に見え侍りけるに春心花に
よすといふ事をよみ侍りける

大貳實政

春毎に見るとはいへど櫻花あかでもあるかつれなき花を
花をのみこそ思ふなりけれ

大中臣能宣朝臣

いにしへの花の色にも千代までもかはらぬ物はおもひなりけり

河原院にて人々こゝろざしをよみ侍りける

平兼盛

道とをみいりてハ見ねとさくら花心をやりてけふハかへりぬ

遠思桜といふ心をよめる

能因法師

はる咲春はそらにみつかすみの世ハ家にかすみ風ハ都の[illegible]遠

さくらとて人をまちてみしかねわひしきまにくらしつ

めて

よの人まつ

うへをとし人まつ花の宿の桜花ちりかひくもるみちのさくらを

さくらさく[illegible]

見んやるとくなる

やまさとの梅

家の人のまつらん花見世にとわか山さとへこそくへきか

やとりしたす

人待ぬやとるみさとをとさて人もわか宿の梅さくら

わか宿の梅さくらひとをまつあはれ人の見ね[illegible]

道命法師

花見んと人ハ山ちにいそけとも春ハいつくにさかりなるらん

紫式部

よの中をなにかなけかん山さくら花見る程の心なりせは

なにとなくしき事侍りけるころ花をみてよめる

藤原公經朝臣

花みてそ見けることしはまたうつろはぬさかりなるらん

堀河右大臣の九条家にて毎山春ありといふ
こゝろをよみ侍りける

前中納言匡房卿

わかやとの桜のかけはよそにみてよもの山へに春はきにけり

宿ゆくしらぬ　藤原元眞

朝ひつる花よりこそ見つる桜もまたさかぬほそ（？）

長暦二年内裏歌合によめる

右大辨通俊

春のいたらぬ櫻とみてやくるかさくらを風のしるらん

屏風旅人の花のもとにやすらふをよめる

平兼盛

花のもとに宿らひもせくこのはなにとゝめしとはいひしやかなしん

屏風之に三月花の宴したるところよめる

てとまちよ二十ひとこのまえにあはれとはくさはなをも

後冷泉院東宮と申ける時殿上のをのこ

花見んと西雲林院にまかりけるによめる

くはしき

良暹法師

こ山雲風家人分むしまつくさのかとみれとや花をなかりけん

通宗朝臣能登守に侍りける時国にて歌合し侍りけるによめる

源縁法師

山さくら白雲にのみまかへはや春の心の空になるらん

宇治前太政大臣花見にまかりたりけるにきこえ川に

らしくゝ

民部卿経信

いにしへの花見し人はたつぬれとちりにし雲のはるゝなりけり

つくしもてさそふにあはれと雨ふりけれは

侍りけるに三月はかりにまかりて門のもとにまかりてあはれ

まうて侍りてかへりてのちもとよりかくいひおこせ侍れは

いひおこせて侍りけるによめる

中納言定頼

桜花さかりになれはふるさとの葎の門もさゝれさりけり
のイ

遠花誰家といふ心をよめる

坊上定成

唐にもあらぬさくら白雲は誰わか宿の花にこそあらん

こしきて花をみてといふ所にてよめる

源縁法師

春ことにみれともあかす山桜年にや花の咲まさるらん

高陽院の花さかりにしのひて東西

まん山乃花見にまかりて宇治前太政大臣

きゝつけてこのたひはいかにとのたまはせけれと

ことせ所傳へ申てひさしくみ中より傳へさせ

こと許なとしもかへ傳へ出なしとかくおもひ

ゆくとてよめる傳へる

能因法師

年をへてみる人もなき山里のいかてかはなのさかりなりけり

思ひたゝて出しはへるにもかへしはへる物を

返し

まちかねしまちしにさくらひさしきにやちり

みなさくらは雨にちりぬるをよ太政大臣

うへの家に見てたる我おりてまつもとより觀音朝臣

のはしよりつかはしける

ちらぬまも我まつ花のあやな桜もさかりたえてよ

夢のうちにて見つる女房花見にまかりて門の

ききよりよめる

伊賀少将

あかつきの事をおもひ見れば門の花見さかり世に

うち九重の大臣のこさきみの家よりて人もさそはて

高寄にて見侍りけるよしのゝ山にて[illegible]
むとしふかくとよめる

大江匡房朝臣

たかさこのをのへの桜咲にけりとやまのかすみたゝすもあらなん

遠山桜といふ心をよめる

藤原清家

吉野山みねの白雲よかはらねは[illegible]

たかさこにまかりて人々に家の花

わかし人々にも見侍りけるよめる

藤原道宗朝臣

おしむとてかはしと遅桜ちりのまゝに散せは

花のちりしは海をん事をきもらぬたよりなる

良暹法師

そのかみ雨に遠山さくらにてらの[illegible]

基長中納言東山に花見侍とて都に

とゝめてのかはしことてのかれにとまりくらせ

侍りける

加賀左衛門

ちるをみえ旅のはとせかへきにくそ散花を[illegible]

東三条院の御屏風に旅人山櫻を見たる所

よめる

源道済

ちる桜くもゐやまのはにかくれぬるつきさへ山さくらはなに
よしの河屏風絵によみ侍りける
所々見へあまたある
わか宿に咲ちるよそに桜花そらにも雪もおしとそ思ふ
大納言公経花のさかりによそへんとつねにとも
猶待ぞさかりきゆる
中務卿具平親王
花をみてちるまでしぼむ宿にすみつゝみる人もかな
川辺

後拾遺和歌集第二

春下

三月三日もゝの花を御覧して

花山院御製

みちよへてなるてふもゝのことしより花さく春にあひにけるかな

天暦御時の屏風にもゝの花あるところをよめる

清原元輔

わかやとハちよまてかさせ桃の花はなもかはらし春もたえせし

世尊寺のもゝの花をよめる

出羽弁

ふるさとの花のものいふ世なりせはいかにむかしのことをとはまし

永承五年六月祐子内親王家歌合に桜

ちるまての花といふ題を人々よみ侍りけるに

よめる

堀河右大臣

はるさめのあまねきよにもくもりなくちるはすくなき山さくらかな

題しらす

内大臣

桜見ときにも人のこさりしをちるこそはなのなこりなりけれ

天徳四年歌合に

平兼盛

ちらぬともせよ散ともあかぬ毎桜もあかぬ人のいつくにかある

大中臣能宣朝臣

桜花またききなちりそなにゝよりて春をは人のおしむとかしる（をしきイ）

屏風絵よさくらの花のちる所成らしみへなる

ところをよみ侍りける

源道済

出しとふちりもてぬへきなむかめの雅とふくしてなつまて

大神ゆえのやまさくら仍くるにとうたよいろは

くらしてわかく侍るようつさのかみなよの

みかへるくまてしとひとしうつらは藻

右大辨通俊

山ざくらさきちるころ桜花まちわひてをちまは

山路花をよめる　橘俊元

何人も道をゆきてちるにみなわかれさきし風のまに

清乃ひと君ほとよめる

坂上是則

櫻ちるこのまにちる春風は花のなきを吹からん

花の庭にちりて侍るところにてよめる

清原元輔

花みけるまゝに行しさきあはれにちりけるを見て

承暦二年内裏後番の哥合によみ侍りける

藤原通宗朝臣

桜しよりちはれこまかへて桜もおなし心そこれなれわらん

題しらす　　　永源法師

心からちるをましそおもふ山さくらちらさせはちるをみまし

三月つこもりに花のちるを見てよみ侍りける

土御門通敏

うき山しいかなる花のちるまゝにあらしもこそいかゝはせむ

永承五年六月五日祐子内親王家に哥合

し侍るによめる

大貳三位

ふく風そおもへはつらき桜花心とちれる春しなけれは

題しらす　　　中納言定頼

年をへて花に心をくたくかなをしむにとまる春はなけれと

家のはなのちりて水になかるゝをよめる

大江嘉言

あくまてもみむとて桜も水の心にまかせてやなる

白河にまかりて花のちりてなかるゝをよみ侍

ける

土御門右大臣

行末もせきとゝめはや白川の水とゝもにそ春もゆかまし

粟田右大臣の家にて人々のこれかれ花をたつねし

侍るところによみ侍る

藤原為時

おくれても咲へき花は咲にけり身をかきりともおもひけるかな

庭にさくらのおほくちりて侍けるを見て

和泉式部

風たにもふきはらはすは庭桜ちるとも春のうちは見てまし（かとイ）

三月つこもりに野の草を見侍りて

藤原義孝

野辺見れはやよひの月のはつかまてまたうらわかきさいたつまかな

つゝしをよめる

和泉式部

岩つゝしおりもてそ見るせこかきし紅そめの衣ににたれは

藤原義孝

わきてこそ紅そめの色もみえつれさくへきつゝしかれ

月輪といふ所にまかりて侍りける恵慶法師か

に庭の花のちりをとてをこせて侍りける

大中臣能宣朝臣

花のちるわかれし庭の面にはおりしもかはらぬ涙そふる

題しらす　　　新大夫御

むらさきはよやかれそめて花の色はいつまてひさしさ猶そ絶

源為善朝臣

花の色おりてかさせはむらさきのゆかりの色やそふらん

長暦二年内裏哥合に花歌をよめる

大納言実季

水そこに山さくら花つゝむかなに岩間におちてなかれゆくらん

民部卿泰憲近江守に侍ける時三井寺にて哥合し侍けるに花の心をよめる侍りける

よみ人しらす

すゝの河桜なかしてもろ人の色みてかくれさる花のかけなり

前つしらす　　藤原伊家

遠さかる人のゆくかたにの里にはやさこそおもひさる花

長久二年弘徽殿女御家哥合にかはつを　大貳高遠

川水に蛙なくなるあしひきの山吹さける井手の里人

よめる　　良暹法師

見る人もなくて蛙の声のみそ井手の山吹さかりなるらん

題しらす　　藤原長能

春きてもつれなき雪の百千鳥かすかにきこゆるやいかなる

法輪に道命法師の侍りける時いりあひのかね
あらしふきけるにまかりて花のちり侍りけれはよめる
法円法師
我いほはわきて嵐のはけしくて思ふもしらす散まてそ見る
三月つこもりの日郭公のなくをきゝてよみ侍
ける　中納言定頼
郭公おもひもかけぬ春なけはことしそまたて初音きゝつる
三月つこもりの日惜春心を人々よみ侍ける
によめる　大中臣能宣朝臣
子規のすむなる宿をしらせなん春をとゝめてなかん里
三月つこもりの日おやのもとにまかりてよめる
永観法師
思ひいつる事のみしけき野へにきて又春にさへ別ぬるかな

後拾遺和歌集第三

夏

四月ついたちの日よめる　　和泉式部

桜色にそめし衣をぬきかへて山郭公けふよりそまつ

四月一日ほとゝきす待心をよめる

藤原明衡朝臣

きのふまておしみし花はわすられてけふはまたるゝ郭公哉

津のくにゝすつといふ所にてよめる

能因法師

わか宿の梅の花よりなる後は山そめゆくもかなしも

冷泉院の東宮と申ける時百首歌たてまつりけるに

源重之

夏草はむすふはかりに成にけり野かひし駒もあくかれぬらん

曽祢好忠

何の花ゆるすの神山のあふひをかけてしめはへて逢

山里の水鶏といふ心をよみ侍りける

大中臣輔弘

笹生けむむしろの内のつまにきて鳴はむかしとくく水鶏なる

山里の卯花といふ心をよみ侍りける

藤原通宗朝臣

わくらはに今もかよはぬ山里は我のみそみる咲ける卯の花

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるによめる

よみ人しらず

白浪の音せてたつとみえつるは卯の花さける垣ねなりけり

題しらず

月影をいろにてさける卯の花はあけはありあけの心ちこそせめ

ある所に歌合し侍りけるに卯花をよめる　伊勢

きける

大中臣能宣朝臣

卯花のさかりになれは時ならぬ雪ふる里の垣ねとそみる

禖子内親王の家あはせし侍りけるに
しもつけによみ侍りける

さかみ

見わたせは浪のしからみかけてけり卯花さける玉川の里

伊勢大輔

卯花のさけるさかりは白浪の立田の川のゐせきとそみる

卯花をとく見侍りける

源道済

雪とのみあやまたれつゝ卯花に冬こもれりとみゆる山里

[illegible]乃大山寺といふところにて哥合し侍りけるに
よめる

永覚法師

我宿のかきねはあまた郭公なかぬの里しらすや卯
[illegible]し源

慶範法師

郭公なれはまてこそしのひつれとのこたへ[illegible]

卯月つこもりころ右近の馬場に郭公をまち
とてまかりけるにかつよみてよめる
三わくれとも

堀河右大臣

子規らぬりなのらしてきのふもけふもやまにこそなかめ

道命法師山寺に侍りけるにつかはしける

藤原為忠

あさはかき海かりしこと若葉の山はさ深くつもるらん

返し

道命法師

若葉の山郭公のこゑ深れかくて鳥の心もきこえよ

禎子内親王かくれ侍りて後ためにける前斎宮

にまゐり侍りけるを後三条院御時斎院に

侍りける人のもとへこのよにもしかとはいはんとてつかはしける

かなきあの日かけはなれよつらしとそ

皇后宮美作

きのふまてかさしゝ神山の子親おもかけに見ゆる

参りてかへりてかへしめくりくれるは侍りけるに人のおほく

まかりてはなとよみ侍りけるを大蔵卿長房

え侍らさりきとてつかはしける

備前典侍

郭公あかつきつかたのこゑをきゝてよみ侍る

雲ゐにてあまたかこえしつかはすてくる郭公

心のかよふとこそきくに侍らねは

大中臣能宣朝臣

きこえつる霧かきまよふ鶴の音は〇ゐ根の山よりこえてきにけり
いかなりける事侍りけるにか中の司
郭公をきゝてよめる
増基法師
このころはねてのこゑまつ郭公去年より物わかてかせよ
あひしし源　播磨貞成
とひぬるまに海とみえる道子家あきてきこゆくと鳴て去時
永承五年六月五日祐子内親王家歌合に
よみ侍る　伊勢大輔
きくともきゝ得ぬ郭公やまぬしきさそれつゝ
能因法師
ゆくふかわけしみてさかん郭公去年の杜にもなかなか
菅原為房朝臣
夏の夜はさてもやなく（ねぬく）と郭公なくこゑ高くまさりけるや
小辨
ほとゝきす数つもらぬ村雨さくらにも枝にひとつゝ
祐子内親王家にて歌合し侍りけるによめる
郭公とよみ侍りける
宇治前太政大臣
あやめ草の根にあれば郭公なにしのふかもしの森

宝治元年太政大臣北海のはに哥合し侍りけるに
郭公をよみ侍る　　赤染衛門
あつめ起もなくさしさふし郭公まつとそやもくいやはねさめ
なをさこえほとまちつつ鳴を誰まてよなきる色ぬかけらむ
相模守にてくたりけるにおいそのもりにて
りとまりてけるにほとときすときゝてよめる
大江公資朝臣
東路のおもひてにせん郭公おいそのもりの夜半の一声
郭公をきゝてよめる
法橋忠命
きつるやとつまたる道に郭公ねさめしてうちかたらふ
長保五年五月十五日入道前太政大臣家哥
合に遠聞時鳥といふ心をよめる
大江嘉言
やとちかきたなかれ寺郭公さて一こゑなく夜半のひに
五月のかはりあかそあかりしよりつらつらしけむ
道命法師
郭公まつかひなしとおもひつれはさての後も待かなわ
五親王つれ歌をとさくの宮地思はなのそみ世にまち
なけやともの人あして雨かくて山寺に侍けるに

郭公といふことをよめる

律師長舜

一こゑはさやかになきて郭公くもちはるかにとをさかるなり

とよめる

道因法師

郭公きこえぬさとのあやめ草ねさへおもはぬあやしかりける

大貳三位

まつみほのかにきこゆ時鳥あかつきちかきなこりなるらむ

小辨

はつこゑのきこえんまてに親のかたみのとこよりもほのかにきかまほしきを

さつきのついたちによめる　さねのりして

なへやとかへしふさ月に成ぬれはおもひいてつゝねをのみそなく

永承六年五月殿上の根合によめる

藤原孝善

さみたれは見えし小篠の道もなし山風さへそわしりとほらぬ

宇治前太政大臣家にて卅講の後歌合し侍

りけるに五月雨をよめる

さかみ

さみたれはみつのみまきのまこも草かりほすひまもあらしとそ思

民部卿経長か桂山庄にてさみたれをよめる

何ゐふら

藤原範永朝臣

さみたれハ見えしをさゝの原もなしあさかのぬまの心ちのみして

橘俊綱朝臣

つれ〳〵と音たえせぬハ五月雨の軒のあやめの雫なりけり

題しらす　數覚法師

五月雨ハをやしくらむのかくぬはまちつゝみのまつ（さわつ）

五月雨ハ日かすへしきみこそとこそおもひかへてゆのかへ

侍りける　恵慶法師

あまたとこあやめにあらぬをあやめ草わかしく駒のさはへなれ

永承六年五月五日殿上根合によめる

良暹法師

つきせせぬこひにみたるゝあやめ草けふはいかなるねにかあるらん

右大臣中将にて侍ける時歌合し侍けるによめる

大中臣輔弘

霞ふ人のねをたえしあやめ草ひくもしらすとしくれ

かくれぬに生ふるあやめのうきねしてはてはつれなきなかやふらん

是ひはあまくゆしつのさ月五日によめる

伊勢大輔

なへてよのうきになかるゝあやめ草けふまてねこそかゝるなりけれ

ちるみ
さらてたに秋のあはれハしのひかたきを山に風や吹らん
大貳高遠
昔せしちらしらさかのかゝるせへにつもりて夏のいとゝ
かはらぬ緑にも見え待りける
源重之
年ふれと世にすむ人をうくひすのなきわたるなる家のうちかな
宇治前太政大臣家卅講後哥合し侍るに
かはらの螢をよめる
藤原良経朝臣
沢水に空なる星のうつるかと見ゆるはよはの
螢なりけり
能因法師
ひとなつの蝉のこゑこそ夏のしけみにすゝしかりけれ
源重之
夏かりの玉江のあしをふみしたきむれゐる鳥の
たつそらそなき
夏衣立田河原の柳かけすゝみにきつゝならすころかな
ひむろをよめる
源頼實
夏の日になるまてきえぬ冬氷春たつ風やよきて吹らん

なかれ川の夏の月といふ心をよみ侍りける

西園寺右大臣

夏の夜の月は涼しくやとる水にこほるとそみる

大貳資通

あふさかのあつさはしらて関の清水夏のうちに

宇治前太政大臣家にて三十講の後歌合

し侍りけるによみ侍りける

民部卿長家

夏の夜のやすらふほとの月影に秋の風そふとみえつゝ

中納言定頼

夏の夜の月のかけしくに庭の雨とそおもひけるこゝろさへ

道濟かもとより雨夜こなたにとおもひまうでこし

に付てよみける

能因法師

いつも今夜の雨こそ夏の夜にもさえるかはり

曾禰好忠

題しらす

きてみれはとまる家ちかく山杜のもとよりさえるこゝろの花

平兼盛

夏くさのつもりてもおほえす木の下草のうち

夏秋のしをれにあはれとわひ侍るなる

堀河右大臣

なにとなく夏の日くらし残るらむ今はたゝ秋のこゝちこそすれ

くれのなかあけゆくの月をとふらん

内大臣

夏山のわかはの月とみるまてに秋とまかふる風のすゝしさ

後冷泉院御時殿上にて晩涼如秋といふ心を

よみ侍りける　源頼綱朝臣

夏山のならの葉そよく夕くれはことしも秋の心ちこそすれ

屏風絵に夏のはてのところにみなつきはらへしたる

家あるところをよめる

大中臣能宣朝臣

とこ夏をとくおくらすみな月の小倉山秋まつころのみそきかは

いつしかとこえてすゝしきなこしなりけり

よみ侍りける

源師賢朝臣

さ夜ふかき岩井の水の音きけはむすはぬ袖もすゝしかりけり

六月はらへをよめる

伊勢大輔

みそきするみなかみ川のはやき瀬に夏をはすてゝ秋やきぬらん

後拾遺和謌集第四

秋上

あきたつ日よめる

よみ人しらす

打つけに袂すゝしくおほゆるは衣に秋はきたるなりけり

恵慶法師

あさち原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋は来にけり

藤原為頼朝臣

大かたの秋くるからに我身こそかなしき物と思ひしりぬれ

七月六日によめる

小辨

たなばたのあふせをまちし年月の今夜といふにおもひかねぬらん

七月七日庚申にあたりて侍りけるによめる

大江佐經

いとゞしく露けかるらんたなばたのねぬ夜にあへるあまの羽衣

七月七日よめる

小左近

七夕にあさひくいとのみだれつゝとくとやけふのくれをまつらん

七月七日宇治前太政大臣のかやの院の家にて

人々まかりてしはしあそびけるによめる　憶年女

喜志こそたえせぬよはひ侍りける

堀河右大臣

たなばたは雲の衣をひきかさねかへさでねるやこよひなるらん

七月七日かちのはにかきつけ侍りける

上総乳母

天河とわたる舟のかぢのはにおもふことをもかきつくるかな

長能が家にて七夕をよめる

能因法師

秋の夜をながしといかでたなばたのあふにはかへてをしまざりけん

七月七日よめる

橘元任

さよのおほそらの風にいつもより月さえのほるかなかなし

右大将通房

侍ける所にてうちにて人々月のおもひえかゝりとおもひ侍

十月十五夜にこれかれ月のとうけてゐて

かくいつゝ侍らんよしまうされはとおもひゆきおい

のさてとみえてよみ侍りける

新左衛門

とあれはいかてよにやまにあかれいかれるかなさきとも

十月十五夜風とのみてふきさゝ月影にまさる

月のおもしろかりて八月まてあかくさへまさりける

とおもひまちかねてよみてよめる

小辨

なかさらのみあ事いはと…さそふつるもつれ

居易初到香山心をよみ侍ける

藤原家経朝臣

分きてこそ人の心をおもひわけすめる秋の月かな

客依月来てかゝりとさためのをとつれても

らみ侍けりしとよめる

太宰中納言正實

是も人々よみ侍りける梅の匂ひ月てりてまつるへからまし
花山院東宮と申しける時御院に於て
翫秋月とまてあそひ侍るによみ侍る
大貳高遠
秋の夜の月見よとてやよるよるは我もあかしのうらにてあかさん
三条太政大臣左右をとゝのへさせておほえく
侍りて許によろこひありて九十六人をえらひて
許よりえ侍りけるよ水上の秋月といふ心をよ
み侍りける
平兼盛
まかとりの無辺をわたる人もなし水に光をそへて秋の夜の月

堀河右大臣家より歌合し侍りけるに秋
月をよめる
源為善朝臣
秋の月光をあらそふ程なれやまつの梢は秋も色なき
河原院にまかりてよみ侍りける
恵慶法師
すみなれし昔の人もなきやとにたゝ秋の夜の梅の匂月
世をのかれし頃
永源法師
あさかほのたえぬ秋の月かけにみるかなしひの人をまつらん
くもらぬ人の世の梅の香匂ふ月をとよみておもひ
あらしの風吹月をよめる

源道済

余所にても雲のうへにて見る時も秋の月にはあかぬなりけり

寛和元年八月十日内裏歌合によみ侍りける

藤原長能

有見ゆる月をそおりしも秋の夜はいかなる色をそへてさすらん

月もかはり月くもかはらぬ心をよめる

前大納言公任

すむとみつゝもあかぬ世中にすくともあかぬ秋の夜の月

ひろさはの月をみてよめる

藤原範永朝臣

すむ人もなき山さとの秋の夜は月のひかりもさびしかりけり

山さとにすみ侍りける人のもとにまかりて

月をよめる

素意法師

まつ人もなき山さとにいかにしてすみける月のかげを見るらん

さびしさに

藤原国行

あさぢふの夜の袖を露けしとやどる月のかげぞみえける

八月十五夜よめる

惟宗為経

いにしへの月かゝりせばかつらきの神はよるともちぎらざらまし

堀河右大臣

秋よすからみし月をおもひ出て秋になるまてなかむらん
前参議隆職
うらむともえこそわすれね秋ことにみる人もなき木のまの月
赤染衛門
いかにしておなしそらゆく月なれはかくもかはらぬ心なるらん
返し　よみ人しらす
秋もなほ九重ならぬ月なれとつきせぬものはこゝろなりけり
我人とも賀陽院にて八月十五夜月をみて
かきくもりしはしもおなし月をみむとおもふこゝろはなくさまれけり
覚源法師
なかむれはこゝろそつきぬ
清原元輔
秋の野の花のにほひもとく暮てよそにもかなし雲のかよひち
さやかなる月のひかりもかはらねとおもひしよりもはれぬ夜そなき
大江公資朝臣
さや山のおくまててらす月かけにひとりなかむる秋のよの月
前大納言公任
いまはとて秋の夜の月のおもかけにわかれし人をなほやまつらん
返し
四条中宮
あはれなる秋はさなからなかめつゝ心の中にしのふ月かけ
長根寄の思ふにきゝし宗かともなかにすくなき山のはの月

[illegible]

[illegible]秋よめる

道命法師

ふる里はあさちかはらとあれはてゝよすから虫のねをのみそなく

[illegible]

平兼盛

あさちふの秋のゆふくれなく虫はわかことしたにものやかなしき

大江匡衡

秋風に声よわりゆくすゝ虫のつゐにはいかゝならんとすらん

[illegible]

[illegible]

寛和元年八月十日内裏歌合によめる

藤原長能

わきもこかかけてまつらん玉つさをかきつらねたる初雁の声

雁をよめる

赤染衛門

なきよわるまかきの虫もとめかたき秋のわかれやかなしかるらん

後冷泉院御時后の宮の歌合によめる

伊勢大輔

さよふかく旅の空にてなく雁はをのかはかせや夜さむなるらん

宵のまに小雨ふりそめてこよひもあめてか
よませ給けるに帳中にて歌よませ給ひて
御製
さよふけて道とほきあふさかのせきのしみつにかけやみえけむ
八月こまむかへをよめる
良暹法師
あふさかの関の杉むらたちひくほとはをふちにみゆるもち月の駒
（杉のむらたち）
源縁法師
みちのくのおふちの駒もひくときは霞にまれて
屏風のゑにこまむかへしたるところをよめる

侍りける
恵慶法師
もち月の駒ひく時はあふさかの木の下やみもみえすそありける
禅林寺に人々まかりて山家秋晩といふこころをよみ侍りける
源頼家朝臣
暮ゆけはあさちか原のむしのねに
正基朝臣丹後守にて侍ける時くにゝて歌合し侍りけるによめる
源

鹿の音に秋をしるらんみゆる武蔵野の一乃枯あんとわかる風も
萩咲く待鹿とこそふみかへて
御製
かひもなき跡(?)ならしそ(?)まつ(?)虫ひとり(?)萩(?)はら(?)なく
山さとに鹿をききてよめる
大中臣能宣朝臣
秋の野にみだれてさける花の色の鹿のなくなる声をきくかな
堀河右大臣家歌合によみ侍ける
源為善朝臣
秋もなほこころをそへて鹿の音を聞きつる(?)夜半(?)の書きなる

むしし次
安法法師
鶏なく萩の下葉もみえつるを(みえず)あはれ(?)やすまつ(?)鹿ぞ鳴なる
能因法師
我ひとり秋萩原の風(?)鹿ぞ鳴なる
嵯峨野亭にてよめる
観覚法師
今朝きつる(?)そでぞぬれけるみやこにて(?)深山の秋の野辺の露
題しらず
藤原長能
宮城野に妻よぶ鹿ぞさけぶなる本あらの萩に露やさむけき
祐子内親王家歌合によみ侍ける

大貳三位
秋ことに鳴きぬる〇をまた廣く數へつゝ今年にくれ
藤原家經朝臣
麻乃葉をはらふ風にもてそ我ものと草葉の露や玉のみん
江侍従
小倉山紅葉にみちぬ名にし鹿の音まて聞しそのかみ
あはしとそ思ふ
晴るゝ野のこの花そかへすまた秋に風にみたるゝ露やおもへん
天台座主源心
のこはみ紀の今年まて庭の秋の露をなけきてわかなつかしきれ

とのゐにも事わかれてこゝろしきことを秋風のこゑ
伊勢大輔
松ふかみ見えつゝ見し萩の上露やさためさる秋の夜風
見そなはしふすまをたてゝよそふ
能因法師
思ふとも秋の風に我袖そてわかの上風萩の露やかゝ
ちるやと〇のあはにかはりても人もこゝろえ待
きゝなれめ
新右衛門
さそふ風に萩の上の花にやそて乗る露もあはれ
おもひしらるゝもの人待くるゝ

中納言女王

今宵見る秋とき風ふかくなり露さへ霜と
月つこをかよふ萩の枝はつゆおもくなり命
きり川かぜにしろしみゆる

ゑらし法師

かきわかれ中空にのみなりぬれはしら露をのみ萩の風そよ
もろかつらかの今宵の家に寸見侍るころ萩
のをとしけくさそ侍らすにいとあはれなれは
侍りくるとせきわけとおもひつらしきを

流前乙丑

白露も心をきてや思ふらん萩の上葉の秋をしるらん萩
家のちくさ残人のこひ侍るといへる

梅則長

さく露はをきて枝さへおもみ萩もえいふて待もんや秋萩
まつりしら寸

源時綱

露おくる秋風吹のおさらすまし、つかれ秋風

藤原通宗朝臣

秋風に吹たちかわるなかしく萩鶉なくなり
草むらのつゆをもしらぬ侍らん

藤原範永朝臣

あきゝりの晴せぬ野への露に我かれゆくやたつか萩か花
よそにしてはなくのらすれ野とはいさゝらむと思
ちる袖も露にぬれつゝ

素意法師

秋風の萩のおき露たまらねは袖のうへにそおきかはりける
まつしらす

藤原長能

しら露のおくかたのみぞまつ風はたえず吹くらん白露の玉
かゝる

寛和元年八月七日内裏哥合によみ侍る

橘為義朝臣

いつくにもまよふへきかな萩か花露おくほとのしらぬまに露

題しらす　良暹法師

袖ふれは露こほれけり秋の野はまくりてにてそ行へかりける

宇治右大臣家哥合によめる

源親範

秋の野にはなをさむしろをきてみれはつゆのうへにそあきかせそ露

殿前栽のはしのもとにまうけてくらよの宿
とふつゆのおきさとみつゝこゝにしくよみける

大中臣能宣朝臣

草かれにかれそておくすゝきのうへの露をしもおもひこそすれ
人の家の水のかとにみえしとしまも見えける

よみ侍りける　　堀河右大臣

ときはなるひとりのみこそをみなへしうつろふ花にあはれなる

うへおきしこゝろは千載かはらしのへをみなへしかはらぬそ

しられさりけるつゆもしらるゝ

梅則長

女郎花さかりのほとにあはれにもなくさめかたくおもほゆるかな

題しらす　　前律師慶暹

秋風にをれぬはかりの女郎花つゆのみやとりおもひこそやれ

天暦御時の御屏風にをみなへしのある家に

人のやとれるところをよめる

清原元輔

あさきりにむすほゝれたる女郎花むすほゝれこそ常もみえけれ

毎家有秋といふ心を

御製

宿ことにをみなへしのやとりをやそてのにほひにたちかへるらむ

題しらす　　源道済

よそにみてゆかむことをもしらぬかなをみなへしたにつゆよりもけに

和泉式部

あきくれはゆくもかへるも女郎花ちりのこるらむのへのさかりに

題しらす　　源道済

いとゝしくさひしきものを夕暮に秋とおもへはゆく風そ吹なる

村上の御時月のあかゝりける夜人〻にうたよませ給ひけるに
ちかき声ひくよしてさそひ給ひてうたよませ
ゆふくことによみ侍りける

新宰相

さらてたにあやしきほとの夕暮に荻ふく風の音そきこゆる

堀河右大臣家にて歌合し侍りけるに秋の夕
をよめる　　よみ人しらす

秋風によそのもみちはちりぬれと [illegible]

資良朝臣 [illegible]

三条小右近

なかそらにおもひし人の音もせぬ荻の上風ふかぬまに [illegible]
秋とてもわすれぬ人のまへにとこさら
なかき夜をわかよの [illegible]
あらし侍りて

僧都實誓

荻の葉に風のあかなく風の音そさためてわかなみたかな

花山院歌合せさせ給ひけるによみ侍
よそにきくことのはなれとたのむれはあきの風そふく

藤原長能

秋風よや吹ぬらむ遠近の表秋にもみちくかなし

山さとのきりをよめる

大納言経信母

明ぬるか川瀬の霧のたえ〲に遠方人の袖のみゆるは

宇治前太政大臣家歌合によめる

藤原経衡

ためあさ風のふくかは花露にしもまかひくる方にみえくまり

野花を見てをのこともうたよみけるに

源師賢朝臣

さそはれて花よりもなき秋の野にいとしもまかぬ萩ちるらめ

天暦御時御屏風に八月十五夜あそひしたる所をよめる

清原元輔

おしなへてわかめくるわか宿の花ならはいつれの秋かちらさらん

水邊秋花をよめる

大中臣能宣朝臣

水かゝみに花の匂ひをうつしてそ世ゝの秋のためしとそ見る

庭移秋花といふ心を

関白前太政大臣

我宿に秋の野へをはうつせりと花見にゆかん人につけはや

思野花といふ心をよめる

良暹法師

あさぢふに思ふ心は露なれやかからぬ花のうへ下にはきえて

橘義清の家にて歌合し侍りけるに庭に秋花をつくといふ心をよめる

源頼家朝臣

秋萩も草葉もかれてうつろへは籬の虫の声や野へにかよふらん

源頼實

わかやとに萩をこそすれ摘て籬の荒き野辺とかつ

題しらす

良暹法師

さびしさに宿をたち出てなかむれはいつこもおなし秋の夕暮

山寺にわつらひて海よりまかりて侍りけるに秋の

ころなにとなく物あはれにて

和泉式部

あはれなることをきくへしくちをしく池思ひいはぬ秋の山さと

後拾遺和歌集第五

秋下

永承四年内裏の哥合に擣衣をよみ侍ける

中納言資綱

から衣なかき夜すからうつ聲に我さへねても明しつるかな

伊勢大輔

さ夜ふけて衣してうつ聲きけはいそかぬ人もねられさりけり

藤原兼房朝臣

うちはへてやすむまもなき衣うつにたえぬくるしき海士のしわさか

花山院哥よませ給けるによみ侍ける

藤原長能

すみのえのまつにて秋の月をみてよみ侍ける

選子内親王ありてこそ時九月十日

わかるともよはひなかきなれはまてそかし

きりもまかきとしにかはらぬそのてよみ

よろつよやまき

新院中務

月はよしはけしき風の音さへそ身にしむはかり秋はかなしき

山家秋風といふことをよめる

大宮越前

峯と嵐山の松のみとりはかはらねと秋風吹そかはれる世

をいしまず　源道済

月をそ世にみちるさかりのまゝそらにかゝるらしてそしゝ秋かは

永承四年内裏歌合に

堀河右大臣

いつとなくくまなき月のよりみちゆくそらの秋のよはいかにそ

宇治よりくもりゆきとまりてあやしきまてもみゆるかな

待らるよしかな

菅原経衡

はしつくのふかくにみちる月をよしこそ秋のよはいさよかな

おく長楽寺にすみ侍りけるころ人のかりとてかこ
のころは京におもふこともなくて侍るといへはよめる

上東門院中将

このころは木の枝にさかりも麻てゝいそく秋の山里

屏風の絵にくるまよせてもみちみる人あるところ
をよめる

藤原兼房朝臣

山里は紅葉見にとや思ふらんちりかゝるをもみる人ありけれ
とみちにかはつるわさしことふ人もかなと

頭つかうてよみて侍るける

右大弁通俊

いかなれはおなし時雨にもみちする柞の杜のうすくこかるらん

あしたの京にすみ侍りける人のもとにおくりけれはおほそらのち
雨の紅葉のさくいまをそへてよめる

恵慶法師

よるしわかやくて菊のいろに花もちるをさそふかぜ
中納言定頼のわたりてよみわたりけるまゝに紅葉のちる
まさし大井川のうつりきみ

大貳三位

つかうまつりけるかたに秋の夜見せんもの菊にも
上東門院まいりける世に紅葉のちるにかはりにけらし

つねくらへとあめくよめる

伊勢大輔

移ろはん風ふきつらんさきに菊の花よりわかの色しみえけれ

藤原義忠朝臣

しらきくはやへにさきつる菊の花むらさきにこそうつろひにけれ

後冷泉院御時后の宮にて人々残菊翫といふ心を

よみ侍ける

大蔵卿長房

あさまたき八重さく菊の九重にみゆるは霜のをけはなりけり

きく花秋のとまりとしらねはや紅葉をさそふ風にまかせむ

をしめとも秋のわかれを菊の花なとかうつろふ色をみすらん

赤染衛門

ここにしもあきのかたみとみえつるは菊のうへなる露にやあるらん

天暦御時御屏風によみ侍ける

清原元輔

うゑしよりのちに色こき菊の花つゆのやとりとなりにけるかな

屏風の絵に菊の花さきたる家にきたる人をよめる

たれか又やとにうつして菊の花

大中臣能宣朝臣

からにしきおりかけたる菊の花つゆをつらぬく玉とこそみれ

いくとせかかへりたる菊の花ちとせをまつにたくへてそみる

よきれし九月つゐたちおもひの外に待なる
をみてよめる　良暹法師
白菊のうつろひ行そ哀なるかくしつゝこそ人もかれにし
相模公資にわすられて後菊の家にまかりて
思ひきやうつろひゆくをなかめつゝ待にしよなる
藤原経衡
撰とき人の白菊の花をおもひやりておもひにたへかね
世の中にはかなくてのみ侍りしまゝにさかりなき
ことしのさくをとておもひ待にしよめる
中納言定頼

我のみやのちも忍はんしら菊の花のうつろひなは
永承四年内裏歌合に菊をよめる
中納言資綱
むらさきにうつろひにしを置霜のなほしら菊とみするなりけり
寛和二年正月入道前太政大臣大饗し侍
りける屏風に山里のもみちみにき
よめる
大納言公任
山里のもみちみにとや思ふらん散はてゝこそとふへかりけれ
屏風の絵に山家にをとこ女のもとにきたり
とまりてはべるところをよめる

平通盛

るかにほのみえ海にすみちえたる末のとゝとまらかへれ

山さとにまかりてよりの見侍らん

清原元輔

白たへのちることなかれはわか宿とそとまる秋の夜半

月前落葉といふ事をよませ給ける

御製

紅葉の面とゝまる木からしにさそはれゆく風に紅葉とちらん

落葉といふ心をよめる

法印清誠

とみ花ちる桜の山の空ふかくかすみわたれる道をしるへに

式部卿のみこにおほ井河にまかりわかれける時

紅葉をよめる

氷上にみちのあらしふく大井河むしのこゑゆく瀧の紅葉

堀河右大臣

大井河のかくよりみ侍る

中納言定頼

氷とかみえてみたる大井河さすかにちりて袖とちる

永承四年内裏哥合によめる

能因法師

嵐吹ミむろの山のもみちはゝ立田の川のにしきなりけり

題しらす　藤原範永朝臣

君ならてわれもわれならて[illegible]秋[illegible]

後冷泉院御時后の宮乃哥合によめる

伊勢大輔

秋の夜ハ山田のいほにいなつまのひかりのミこそもりあかしけれ

帥資綱朝臣梅津の山庄にて田家秋風といふ

こゝろをよめる　源頼家朝臣

宿ちかき山田のひたにてもかけて吹秋風にまかせてそみる

宇治前太政大臣家哥合に秋の田をよめる

良暹

秋風に[illegible]山川の水[illegible]成けり

題しらす　源頼綱朝臣

名にしおへハ[illegible]秋[illegible]（の空へゆく）

九月盡日惜秋心をよめる

藤原範永朝臣

わかれゆく[illegible]

九月盡日終夜惜秋心をよめる

[illegible]野へ[illegible]秋[illegible]

九月盡日よみ侍ける

法眼源賢

秋のくる方にもあらぬ我宿のまかきに霜の今朝はおきけり

九月盡の日つほね大将のりしとまつりける

大貳資通

たつひめ今日そわかるる杉の葉のあかき秋風吹まさるなれ

九月晦日よみ侍ける

源兼長

暮すくるあきをこそおしめ色かはる浅茅か原の秋風ぞふく

# 後拾遺和謌集第六

## 冬

十月のついたちころ上のをのこども大井河に
まかりて歌よみ侍りけるによめる
前大納言公任
おちつもる紅葉をみれば大井川ゐせきに秋もとまるなりけり

十月のついたちころもみぢのちるをよめる
大僧正深覚
なにしおはゞさもみぢ錦を神無月[illegible]

康保三年十月今上みかりのついでに大井河に
こと[illegible]逍遥せさせ給ひて
御製
大井川ふるきながれをたづねきてあらしの山のもみぢをぞみる
かつらの山庄にて[illegible]
詠める
藤原為房朝臣
[illegible]も[illegible]音する時雨[illegible]
山里にしぐれをよみ侍りける
永胤法師
神無月[illegible]山ちかき里

落葉如雨といふことをよめる

源頼実

木の葉ちる宿はきゝわく事そなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

藤原家経朝臣

もみちちる音は時雨のこゝちしてこすゑのそらはくもらさりけり

十月ばかりにやまさとにまかりてよめる

能因法師

神無月ねさめにきけは山里のあらしの声は木の葉なりけり

宇治にてあしろをよみ侍ける

橘義通朝臣

あしろ木にもみちこきませよるひをは錦をあらふこゝちこそすれ

宇治にまかりて網代のこゝろをよみ侍る

中宮内侍

宇治河のはやくあしろはなかりけりなにゝよりてか日をはよらん

ちりつもる網代のさかにさやかにおやかは川の千とせ

とよみ侍りけるをきゝてよめる

藤原孝善

きわ晴てあやなく千鳥なくなるはなみのあしろにさえわたるらん

永承四年内裏の歌合によみ侍りける

題しらす　堀河右大臣

さゆる浦風の夜半のあかつきに千鳥なくなりふねのとまりに

[illegible]

なにはかたあさみつ塩による千鳥浦つたひする声きこゆ也 せイ

きこゆなりけり　なつこきさの梅

さひしさにねさめもすれは松風のおとのたかきに冬の夜の堂

冬のよの月をよめる

大貳三位

岩もるも月もあかしのうらなれは冬の夜の月

影しらす

増基法師

冬の夜はつくつくなかきねさめしてあかつきの庭の雪にはしまさきかん

障子にゆきのあかつきのかほりをとよ

題しらす

民部卿長家

をとこ山の嵐にもたく雪と風のまにまにちるかな 本イ

ほのかにそみえ

能因法師

おとは山霜も海にみえけれはあさきの浦にぬれぬ

律師長淵

難波霜かれに嵐にあさるはこの浦にかせ

屏風の絵に十二月よめのりとよ人

あらたなりとよめる

大中臣能宣朝臣

霜かれの草のとさしハあたなれとなへての人をいるゝものかハ

霜かれの菊をよめる

少輔

色かれハいかなる色にそめなして霜にうつろふ菊のはなそも

霜菊紫をといふ心をよめる

よみ人しらす

むらさきの庭の菊をもとよめるかとよそにミるまてうつろひにける

あられをよめる

大江公資朝臣

杉の板をまはらにふける閨の上におとろくはかり霰ふるなり

山さとのあられをよみ侍る

橘俊綱朝臣

さ夜ふけて見る菅原の里にしも霰ふりしく音のさやけさ

永承四年内裏歌合に初雪をよめる

能因

都にも初雪ふれは小野山のまきのすみかまたきまさるらん

うつりかはるとよめる

素意法師

里人のわたりはまたの道もなくしらしのよしもふれる雪かな

源式部卿のみこの家にて松上の雪と
いふことを人々よみ侍けるによめる
藤原国行
わか宿も松に上ふりにける雪の木にもたちやらぬ雪
隆経朝臣甲斐守にて侍ける時たよりにつけて
つかはしける
紀式部
思ひやるかひの白根はさらねとも雪ふかくてそ思ひこそやれ
山風雪といふ心をよめる
能因法師
まみちの人の中にも山おろしははひ雪のふりかゝるかな
といへる
源道済
わか宿の軒の雪かとみるまてに世を山風にこほる月かな
慶尋法師
あし道をうちかくす雪にふりさればかけわたる人のしらぬさとかな
菊園房
人ゆかぬ路にふる雪の風にさはられみたる雪の山道
能宣のさとといふことをよめる
津守国基
ひとわかぬ草葉も枯はさむき風にかゝる雪をみるかな

屏風の絵に雪ふりたる山里に女のなかめゐたる
所によめる　　赤染衛門

春やくる人やとふともまたれけりけさ山さとの雪をなかめて

道雅三位の八条の家のさうしに山さとの雪
のあしたまらうと門にある所をよめる

藤原経衡

雪ふかみ道なき道よりそきつる山里は我よりさきに人こそきけれ

源頼家朝臣

山里は雪ふりつみてかたもなしはきてもゆかぬ人はまちけり

法師になりていはくらにすみ侍けるに雪ふりけれは
人のもとにいひつかはしける

信寂法師

松もひく雪こそ山をかくしけれ人のかよひし跡もなきかな
世にしられす　とひくる人もなし
おなしことを風のをとさへ聞ゆなる大原山の雪のあしたに

天暦の御時御屏風の絵に十二月雪ふりたる所
をよめる

清原元輔

我宿にふりしく雪を春にまた年こえぬまの花とこそ見れ

雪ふれるあした大納言経信のもとにつか
はしける
入道前太政大臣
[illegible]雪つもるらんと思ひ[illegible]
雪[illegible]
[illegible]
前大納言経信
[illegible]
[illegible]をよめる　頼慶法師
[illegible]
[illegible]　覚法法師
[illegible]
[illegible]　僧都長算
[illegible]
曾祢好忠
岩まにはこほりのくさびうちてけり玉ゐし水も今はもりこず
[illegible]　藤原孝善
[illegible]の池は[illegible]
後三条院東宮と申ける時殿上にて人々

の音めくらしとよみ侍りける

藤原明衡朝臣

身まかりける風おとゝ（とも）にあひ侍りて家つとめ侍りつ
十二月のつこもりころに備前国より出羽舞ら
ありし所にてよめる

源為善朝臣

冬の夜のくるしとくれはとしくるゝをきやゝてもおいぬらん老しらむ

後拾遺和謌集第七

賀

天暦御時賀の屏風哥立春

源順

きのふまでよそくしのせぢちと世の春よあかん桜を

入道摂政の賀し侍ける屏風に書る

わかなつむところをよめる

平兼盛

ねをせぬすゝの松のちに植ゑりきさことのみえよふるか

なほ屏風によむへきうの時さうさて侍るを

よめる

ひさしれぬをきみの晴よりかへてよ世八月來きさかしもみえ

東三条院四十賀し侍ける屏風に子日し

ちりとむろまつりわれて松ひくをみなる

源兼隆

かすがのゝ野辺の松かれ君かよろつ代ハまつらん

前大僧正明尊九十賀し侍りけるに宇治前太政大臣のつゑつくらせて侍るに

よめる

前律師慶暹

君をいのるちよのかずにとるつゑはきみがこのみをつきそめにけり

内裏の御屏風に八月十五夜人の家に
松うへたるところを　平兼盛
春秋もしらてこしかは我宿に松と鶴とのよはひをそへつく(?)
屏風のゑにようめいのかたはらにまつかひとりある
所を　源道済
一とせに松の音しそ[illegible]さゝ世ところ[illegible]
[illegible]すまう　よみ人しらす
君かよをとちかふ[illegible]
後一条院うまれさせ給て七夜に人々まいりあひ
て女房さかつきいたせと侍けれは
紫式部
めつらしき光さしそふさかつきはもちなからこそ千代もめくらめ
後朱雀院うまれさせ給て七夜によみ侍
ける　前大納言公任
いときなき衣の袖はせはくともこうのうへをはなてつくしてむ
題しらす　よみ人しらす
君か代はかきりもあらしなかはまのまさこのかすはよみつくすとも
或人云この哥七夜に中納言重之朝臣(?)のもとにて
故第一親王うまれ給へりけるいつかの夜(?)新家(?)

むすはれしちよの内裏よりうつしうゑしは
みとつゝらん今そこしかえ待るらんよあらん
右大臣顕房
昔よりちよのたのしき色にあらはれてたれかは千とせ松の色ならん
おもひ敷こゝろも世をへて待るらん七ふしよあらん
清原元輔
いかに松の千とせのかけにたちかくれ世にも住世ゝを見つゝ
匡房朝臣まれなりく待るらんよろふたぬつとも
せきうつゝそすとてしあらん
赤染衛門

雲のうへに今もひさしくかせの聲むかしにかはる弓一ふ
おかしも七夜よなかれ待るらん
くちせぬ松の千代のみ代もありなかき家の風よりてあらん
頼みし親王のいつせもせよ寛白おほとちかくら
雲さむる事おはしてうちおほせなん待てものせさせ
八洲大臣ものせよ待るらんこそしをらせまかる
待るらんよせんかたよあらん
右大臣
千年経る松の松よりかさねて雲のわかえしたるゝ八十つめ
見こゝうち冷泉院親王まかりてのちいまも世

なるらむ

花山院御製

〇事中まゐらさせ給梅子のむさくつゝみなはといひ侍りける
頃三条院みこの宮と申ける時今上おはしけり
おはしましけるにあつまにおはしまして世をも
わすれぬみえけるに海つらをわたらせ給よませ給ひ
侍なる

伊勢大輔

君みれはちりもくもらて萬代のよはひをのみもます鏡の
かな

閑院贈太政大臣

くもりなき鏡のひかりますゝもてらさん影にさしあらや
むまこのおまなゝ夜とすることのふみつかはしけるに
ねちつるのこのちよのかしこをおりひとつにてとし
いのよとこそおくねなる道しまつらしきみ

藤三位

思ひやれつるのこかれおもひさへ世りともまつ袖あきらを
紀伊守為元ねさゝきみをてつまくこれおもひ
多くさくよみてつひ侍をねたまふ

清原元輔

おほよそこもつとめよしへの園ちのうらみのみちの露にわ

人のとき侍りけるによめる

住吉浦のまつをむかしにあけく渚の松かけをしそこめ
人のたきさなかへくのこゑふかくとさせ給
かはせさせ給ふ波をきちあしし侍りけるに
きかせて

源兼長朝臣

ならにおはまし千年のためしにこそ松原よりこそ川やなかれぬ

大中臣輔長まかへに侍りける外戚にて
ちかく物語云賀侍りけるをきゝてよめる

藤原保昌朝臣

かくしつゝおほやれわやとらぬあはこれのちよを思ひつゝ

三条院みこの宮と申ける時帯刀の陣の歌合
によめる

大江嘉言

君か代は千代にひとたひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

長暦二年内裏歌合によみ侍りける

民部卿経信

君か代はつきしとそおもふ神風やみもすそ川のすまん限は

宇治前太政大臣の家に卅講の後歌合し侍りける
によめる

藤原為盛女

思ひやれこゝろの君か為ひとりはけふのゝちをかゝ
永承四年内裏哥合に松といふ事を
能因法師
かくる山岩ねの松は君かためちとせのみかはあまたよそへん
おなし哥合によめる
式部大輔資業
君か世はしら玉椿やちよともなにかいのらん限なけれは
冷泉院にはしめてわたらせ給ひて池水ひさしくすむといふ
心をよませ給ける
御製
岩くゝる滝の白糸たえせてそ久しく世々にへつゝみるへき
東三条院にて東宮わたらせ給て人々いはひのこゝろを
あひともに祝ひ侍けり
小大君
君をのみ思ひの水とおもふかはみたらし河の流をもくみよ
関白前太政大臣六条家にわたりけれは
侍りけるに池水ひさしくすむといふ心を
よみ侍りける
藤原範永朝臣
おとにのみきゝこしみのゝ池水の代につくとそすまん数はしらし

こしつゝみの歌に丹波守かく侍ける時かは風に
れ收時やまつわの傳めくふちかえをかへし
侍けるとて

良暹法師

千年まて君かつむへき菊なれは松にかゝれるつゝうれしき

後冷泉院御時大嘗会の屏風に丹波国亀山
松樹多生　　式部大輔資業

萬よふ千代のかけをならへて西のかはあふれともかはらぬ松はみとりにて

後冷泉院御時大嘗会の屏風に大倉山をよめる

すゝきなかるゝ大くら山をまもらなむ名にし負ならはさかえむ

陽明門院にはしめてまいりて侍けるに
とて

江侍従

いにしへの雲井の花にあそひける身なれはさくらうれしかりけれ

後拾遺和謌集第八

別

祭主輔親みまさかの守にて下りけるに野
の花山風のみちのとはゞされどもかへるといふ
つかはしける

恵慶法師

とみちかへしわかれ秋をとゞめかね旅の衣のかさね
ぬし

祭主輔親

うちしきて都のかたちまくらぬ秋風ちゝは世つきなや
おもひつゝ人のとゞめぬわかれなりけり

よ待ことわりてのちとらよかりけれは

源道済

つねよりもおきうかりつるあかつきはつゆさへかゝるものにそありける

東へまかりけるに京をいつる日よみ侍ける

増基法師

東へ出たちけるにわすれかたく思ける人を別侍て

逢坂の関うち越てわかれなはわかるゝ人よりわかさえ

つらしきちよあかつき

藤原道信朝臣

別てのちもあひ見ん春の春もとおもへとやこよひはいとゝ恋しき

ちかりしよ越後よりかはりてのほりけるに

さよは源為善朝臣のもとよりつかはしける

藤原雅規

わかさちは雲井こゆかりつるかな

みちしまりわかるゝ人よりわかさえ

なすとて

藤原長能

あつまよりまかりける人のもとにつかはしける

三月つこもりの日この寺花原為善かかれ

侍もつよりうきこの海のはるとてつらかれ

かへるひとをつきとく待るかな

選子内親王

行春とゝもに立ぬる道といふなかのめかなか霞

返し　藤原為正

いかにつらくとものけふの名残なからましかは松にて思ひ残れ

人のよきこころにあまりあはれなるよ

藤原道信朝臣

あまたゝひもはかなくも立ぬる世中にはたれいつかあらんとすらん

入道摂政わつらひ侍けるころ大納言道綱母

かはりて侍けるとき見えてもおほつかなしとて

見えてもおもりてかくわろくて侍らん

藤原倫寧朝臣

鷹の子をもとひなからおのか心ゆく末とてかはゆらん

返し　入道摂政

我やとの子なけれはこそつゐの松のちよもともにかくてあやなる家のつゝき

あつまりよりつらしきかな

湛円法師

嵐も小倉の山風わかれいつる月もみてよりしのゝめそ

源頼清朝臣みちのくにのかみにて又肥後守に

かはりてくたり侍けるをいつのほとに下るとへは

たくなさしらせ侍りける

相模

あひかれとむかしにかはる末の松かはらぬ松まて

嘉言つくしにまかりてかはりたつとて人ゝあたる

あはれつゝくる

いとつきはわか身ひとつの行人のまてそおもひしく成ぬらん

けしきまてよみわてまかりてわかれつゝはしめて

あかりてまわ能因法師かもとにつかはしける

大江嘉言

ゆくわかへりこむ身の國ゆるふすかれのあれよし

橘則光みちのくにへまかりけるにつかはし

けしきる

中納言定頼

かはそめあらぬわかとおもひ人もとこ川のせきさへこえぬ涙なりけれ

ちゝみちの銀十二月のころかひさきれ使

まうゐわたりまかうあるまかつかはりさけりかん

おとおもひひさし饑なるはまかりかくるかならぬかへらむ

あはれえ侍らぬ

橘則長

かしらなつるとふるさと寂てけりこちへんと子はん

つゝへはたかけつ人はむかしよりよりのとて

人さけてこそあらめとおもふもあさましく庶
ぞらくに宿をゆくへまちよおもひいかなるをたのまんとのひ
つらくよめん侍らず

慶範法師

消ぬべき我も秋のはなめぐりあはんとなるまつぞ命なりける
つくよのおちて後良暹法師おもひよ河ら
つきもうらよめん人しら波
けふこそ中にかきよむはりもりはまだおそくもつらさやさき
返し

良暹法師

名残あるのちのおもひでとなるまでもとまらぬ物とこころとまりて

能因法師しのぶのくさはみかきてそれならよかし
題しらず　　藤原家経朝臣
春の花秋の月にもおとらさわつてとを別とおとらさわなん
能因法師はよのくちよりわがききおしとや
くらよへ今はよのいろむすびしてあきとん春の
かりんとやいはれがほなるかな

源道長

思ひてきかめてはな春の花のさかりはいつまでか
かくて梅人のみちのくにわたりける

源道済

ありし世よ道ハちろうよをあぬさし嵐ちハ出そつ〳〵

のこくまかわてゝあなろよ人ゝまゝそ三ころく

よみ侍りける

こまの岑よ道まふあつ山あまかくよあ花そ〳〵あまハかゝ

さゆつさえまりわさる人よつゝらしさる

中納言定頼

あ嵐松の風吹てもそうひろひて玉ぬ人ゝさゞ波よ貝

返し

源光成

さみしあ声わ色あ人の哀よまよ証ゝうちもそ松の浪

あらしハかよまゝわ侍ろうよ人ゝ餞まゝいろ

すゝらつきしわ寿

源道済

かしつあしの人ハ切しさゝあわさとりて人事ハさハる

大江公資朝臣さかみの守よてくたりわ侍りけるよ

あふさかの関こえむとすれはさらしたくて

よみて人侍ける

源為善朝臣

美濃の別もしらりまふそ別れ道よや春ハあらん人まもせん

あかつき破よ出まん山もほしよつハれ

あらしあかゝゝあゝかゝよ志しとさけこ世を

こゆるきとおもへとおもふことはならねとそてそ
ゆくすゑをこそ[illegible]しきかな

祭主輔親

わきもこか宮こにもえ家こかへ人よんのあはまつれるや
橘道貞(是貞イ)まさりてとわすれてくみちのくにへまかり
ゆきとれて式部かりしとまうてしきかな

赤染衛門

都人ときかはまつりてかへしにとかむよりはわかれの別と
物へひきたる女のさうちともなくとときみえみへくつ
とふらひ侍りけるに

中原頼成

ふるさとにとまるわかれのさひしきにはなれとまたこそほりなきおもかは
いかはたまくたかくてありとてもかたにかまへてもわかなは
なれを女のりしとは雲井たかくのほりてかみなし
きみかかへりたまふかなとおもひつゐなるを事にけ
ありしきかな

祭主輔親

おほ空の雲井をあふぎてまかりしもかくよりの嶺はかならし哉
つらしまのわかれゆくしらぬかすかにも

菅原孝標

かへりてハ猶とや人のおもふらん老てさらまし人のかはらぬとく
つらくともまつかたのみのかはるらん　人の別れ惜みて
侍りけるによみける

連敏法師

つゝまれてさもよつねにとゝまらぬ世をミれハ瀬へなかれ
出雲へくたるとて能因法師のもとよりいひ
けれハ

大江正言

なかきよの花のみやこによすかにや雲のをちかたに
寂照法師入唐せんとてつくしへまかりけるに
とて七月七日よるの舟よりまかりけるにつかはしける

大納言公任

天河のちきりてまちけるをさもまたて舟出をかはしける
入唐し侍りけるみちより源心かもとより侍りける
きゝて

寂照法師

うれしさのいかにまさらむあひみむの別の旅に雲まよふかなとも
成尋法師入唐し侍りけるにやる侍るのちの母
のよみ侍りける

いつかまたあひみむとおもひて雲井までかきりもあらぬ別れを

よみ人しらす

後拾遺和謌集第九

羇旅

いし山にまかり侍るみちにて里野にて
京をおもひ侍りてよめる

堀川太政大臣

わかたちを宿とたのみしけふよりは里村はとたえこそまさらめ

十月ついたちころまかりてまうでゝ侍るにあか
つきまさるのちかくとよみ侍りける

前大納言公任

ゆく道のまたみちのりはゆきかへりさすらへこそやみそれ

ぬし

中納言定頼

きゝわたるいかさきにみちしるへ道まよひぬる

くまのゝ道にて御心ちれいならすおほされけるに

あまのしほやきけるを御覧して

花山院御製

たひのそらよはの煙とのほりなはあまのもしほ火たくかとやみん

くまのへまいり侍りけるに吹上の浜を

みて

懐円法師

宮こにて吹上の浜を人とはゝけふ見るはかりいかゝかたらん

くまのへまうてけるにみちにて月よ

少輔

男ともいさかひして津の国のかたへまかりけるに

舟よりのほりてやとりかるところもなくて

藤原国行

舟なから今夜はかりは旅ねせんしきつのなみにゆめはさむとも

津の國へまかりけるみちにて

能因法師

あしのやのこやのわたりに日はくれぬいつちゆくらん駒にまかせて

東へまかりけるみちにて

増基法師

なこのとのこよみんとねてかくまちしこよひの月をよにもしらなん
ちゝかたのゆふかげかけてみしやまのこともかなしきよのつきかな
みよしのゝやまのしらゆきふみわけていりにし人のあとそこひしき
ありまやまゐなのさゝはらかぜふけはいでそよ人をわすれやはする
おとにきくたかしのはまのあだなみはかけしやそでのぬれもこそすれ
あかつきのわかれをしらぬとりのねにあかぬなごりもしらてなくらん
恵慶法師
やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそみえね秋はきにけり
なつのよのつきはてらぬるとをるまてのこらよりあきのきにけり

すみよしの雲山をいでゝおなじくはまちにまちつゝおもふらん
やすらはでねなましものをさよふけてかたぶくまでの月をみしかな
赤染衛門
あさぢふのをのゝしのはらしのぶれどあまりてなどか人のこひしき
都にはまだ雲の夕風をとつれておきまよふ
増基法師
冬の夜のあかつきかけてをきゐつゝ秋の山かぜたちかへるらん
津の国のなにはのあしのかりそめにおもひしことのながきわかれに
かならずとおもふ侍りけり
良暹法師
よもすがら大江の山をいでゝ雲井のよそにいこま山かな

為善朝臣みちの守にてくだり侍りけるに
みのまことらふわてわすれぬくしらかはみ
さか城人やまてと見侍りける
能因法師
白雲の風のわたるをあら花の山のふもとをかぞふなる見
東風のこゑまちわたるらむよしとりにやまちくれて
源重之
東路のそらもはるかにこえきぬ人の心はいかはかりなる
ちよのさとよ遠山のおくそてにさへてまた越
志ら河の関の守よくよろしくあれと侍りける所

ちしのりとみなくよみ侍りける
大江広経朝臣
わすれぬはみやこの橋をきゝてみやこ出し日の数ぞ
志ら河の関にてわたくしよみ侍りける
能因法師
思ふ人わかれし風のうきことを志らぬ人ぞとふらむ
みちのくにまかりくだりけるに志ら川の関
関にてよみ侍りける
宮こをは霞とゝもに立しかど秋風ぞふく志ら川の関
出羽のかみにてまかりけるときさきとこゝろ

家によせて
よの中はてもたのまれさきに風あらはやと秋霜にも
つゐにくてわたるみちのくまのうらみ
侍るかな

大中臣能宣朝臣
すみ風のよるへ雲井の月さえて
つれ〳〵とまつはかなしき心にや
よるへ

大貳高遠
風ふけはちる桜井のよしの山我も思ひにたえぬ世を
こゝろのあはれにわかぬ身のうさ

かしてわれとふへきこゝろ月とあはれしく
花山院御製
月ぬしにふかのこゝろにかはらしとこのよのことを
とかくのわれとふ末よきなかりよはかわ
あはれ月あはれかるよ中文ろくらん末ふ
まれ侍る哉

中納言資継
おもひやるこの世にいたみ今際われ月をみるも
ぬし

紫式部
めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな

ひとりのみなかめてゆきける道に月にわかれ侍らん
残りのゆへ
月のみや雲井の風にもえなるゝ玉とおはこに翁らまりに
康資王母
うき世の使なくつらくはかりけるみちのよそなる
よその月とまつとうらみむとよそに見侍らん
橘為義朝臣
都にて山の端に見し月影をおなしくもゝかくまて
浪のうへまかりて月のおもかけの結ひ出ける
前大僧都

都にて雲井のよそに見し月も旅の空にて月に今宵
つゝしまれぬきよみちのよそに見え侍らん
西園寺入道太政大臣
五月雨のあまのはらにたなれぬかな野中の清水よそこ中将
浪のうへにかゝれは侍らぬよはりとてそこにはて
露のみ見え侍らす
前内大臣
都にてなかめし月のそれならぬもろともにいつかは
旅のそらなるゝにてみちのよそに見え
侍らさりき

中納言資実

さもこそハ都のほかにやとりせめうたて露けき草まくらかな
いそのかみふるの十二月の十日ころよ母よの出
つきさ月かけのかわきそろは

式部大輔資業

いもかへる舟出のはるの霞にもあらきの風もふきてくれ
つゝしものかわらの見ちよきやまのふ
みをとめてもえ侍るかな

右大辨通俊

わかしきやとの藤わかは舟のりくるやくれさうさむかし

雲下のわかれくるまとなをもて山風の行よ
月おかかわきをれて

橘為仲朝臣

思ひやる月みてみるはむしろのよそに悲しき物思わ
ものこころ中にかのかわ侍るかみちるそ
よそふ

源道済

ちよの世をやこゝろ遠くのんさるゆき山のかすみうちい
たのしみちしりて
ちよのちくちのかゆやかみちとみさこえの月のこゑ風のうさるかな

# 後拾遺和歌集第十

## 哀傷

一条院の御時皇后宮かくれ給ひて後帳のかたひらのひもに
むすひつけられたる文をみつけたりけれは内にも
御覧せさせよとおほしかほに哥三つかきつけられたりける
なかに

夜もすから契しことをわすれすはこひん涙のいろそゆかしき（ゐそイ）

しる人もなき別ちに今はとて心ほそくもいそきたつかな

此ほか女の侍るところにまかりなりて
かくなりまさること ひきかへてのみ

源兼長

ありし法のなかれを尋ね事をおもひのちにちらさてさわ
山さとにこもりゐてわひしく侍りけるにをとこのもとへ
ちるをみえ侍きれてよめる

いつみしきぶ

立のけふりにつけておもふかないつ又我を人のかくみん

三条院の皇太后宮かくれ給くさうそうの夜
月あかく侍けれはよめる

命婦乳母　れいぜん イ

なにとてか雲かくれけんかくはかりのとかにすめる月もあるよに

東北院乃法事せ給くしのさまを野辺に
ゆきさうそう侍けるよにとせこのあまてうち日
せさ[illegible]ひさしくすみ侍
ける

左大将朝光

しらさきの雲乃うへまて[illegible]
[illegible]

大納言行成

とりへのの[illegible]
長保二年十二月に皇后宮うせさせ給ひ
くさうそうの夜雪のふりて侍けれはよませ
給ける

一条院御製

のこすそよひとつにかよふとも我か心のまゝにもあらぬ身の

入道前太政大臣のさうそうのあしたに人〻まかりてかへるに雪のふりて侍りけれはよみ侍る

法橋忠命

たきゝつき雪ふりしけるとりへ野はつるの林の心ちこそすれ

入道一品宮かくれ給ひてさうそうのことゝもはかりて又の日さうらひけるによみ侍りける

小侍従命婦

あはれきみいかなる野への煙にてむなしき空の雲となるらん

二月十五日夜なかはかりにわかき人〻のまへにてかたらひてのちさうみけりとよめるらん

いにしへのたきゝもけふの君か代もつきせぬ法のためしなりけれ

ゐし　法成

時しもあれ法のわかれにあやなくもやまぬなみたの懐にふる道

三条院の御時皇后宮かくれさせ給ひてはらから

くらゐにつかまつりける人〻つかはしける世に侍るか

さうそうの夜よみてきこえつかはしける

きえて川ゆきしける

山田中務

すみれは生れとくしとさしかゝる蔵あくさき秋よあはれのかは
ねのにくさのゝやよ待らるゝ人なりとまつ
つきたる　さりけん
こゝやとはなのやかさす露ぬきさへゝまた君か袖のにちるや
ゐり

大和宣旨

淡河か時てこ和しき孫とや袖つかはとゞ人しらぬかな
後一条院御とき紀中宮九月より世にて後朱
雀院御とふまつ弘徽殿中宮八月かくれ
給ふにまれもかのことやりし侍る御堂御方より
またりきる

お中言出雲

待つわ君か付くらん程かぬ方へゆきつるわかき霞をと
お崇徳院御方か御まるよりけるそのつめんに
いまさみちあまりていかなるさるとて御覧所
ことわて御わきるまつるしきる

小たま

よそよきく袖も露にさかれとき風とのさいて思ひし無
霊山にこもりたる人によせてんとくにまかりたるか
よ方かわてのち十三日よおかてまて見つみ
きてきてしあ

能因法師

ゆふこえて人のかよひし宿のくまさてちやまちかき
右芸采讃後寶子よそれくみけさ給ふ
こゝろみなつる[illegible]

右大臣小弁

いつはりにしかなんとこしの吹よりもやと風秋の[illegible]
あやなくたれて山寺に行くらんのりより
川のみぞしきる

よみ人しらす

紅葉ちるそのとみち落葉にあれ木からといふはさひしかるらん

いそぢの難かおもひよそふれく待くらさきて
うちとけ紀ハつと紀なることをたゝと云つら寸とて
あらん待ちたまる

前大納言隆国

あらん別しいのちかきりもさだめなくまたあはむことしらぬ旅かな

出羽辨

かはしきれくいよるみと思ひし別を志れく君かなゆく六
ちかさ行

高階成棟女

なとくれはるとさて行そ
しきる

中宮内侍

かへ
わりなくも人の成るるみ人様の方ゆかれわれよ

清慎公元輔かもとにやり侍りけるかはりて
さそくきこえし元輔かもとにいひつかはす
とてよめる

源順

よしのやまの櫻とかはるまてちりにしはなのかをそのこれる
橘則長ありしまてかくれ侍るよしきゝてひとゝせ
まうてしける

橘季通

思ひつゝねぬよのかすはかきりなしそてのこほりはとけすなりけり
後冷泉院御時さみたれ雨ふりてつれつれなりける
侍りけるによみ侍りけるを上東門院の
この世にはすむへきほともなかりけりまつ

式部命婦

あかしつるわかなみたこそかなしけれ
後三条院かくれさせ給ひてのちの世の
ひとゝせ六月一日ころ
雨のふりける日先帝の御事おもひ
いてゝよめる

周防内侍

さみたれはかわらぬそらのなかめにもこひしき人の
二条前太政大臣のめのとなりける

あるかみとみえてよみ侍ける

中納言定頼母

わすれなむとおもひしものをこゝろにもあらぬことのはゝなれ

このはそむかれて侍るほとに夢にみえてよめる

侍ける

藤原実方朝臣

ゑくねのこゝろ風秋風ふきにさめぬらむやうに命とはなに

ちれるもみちのいろにこそいみ侍ける

藤原相如女

号みむとかゝること人の命とおもふなる人そおもひ

このうへ六条関白太政大臣のまかりて後法要に

ちれはけふさくらのちりて侍りしに春のくて

みるわれのこゝろは桜かれぬるにこそすゝめ

さまゝゝとよみてくれしとをくかれまかりおくり

きえねともてよみとゝめんひとつゝくかな

相見侍りしかなしとはおもひいつるかはなそこれ

女のもとへつかはしとて侍ける

藤原実方朝臣

蝉のなくなるこゑのおもひてかくもこゝろのうき世

一条摂政のまかりてのちわすれしたなとて

人にもかくよみかはしきとおもひて

少将藤原義孝

今はとてとひわかるめる山鳥のかゝみをかけてあはぬころかな

小式部内侍なくなりてむまこともの侍ける

をみてよみ侍ける

いつみしきふ

とゝめをきて誰を哀とおもふらん子はまさるらん子はまさりけり

一条院うせ給ひてのちなてしこの花の侍けるを

後一条院おさなくおはしましてなに心もしらて

とらせ給ひけれはおほしいつる事やありけん

思ひきこえ

上東門院

見るまゝに露そこほるゝおくれにし心もしらぬなてしこの花

みちのくにの守にてくたり侍けるに人々の送りを

くれけるによかれの今まかりての秋にみ侍らん

藤原實方朝臣

見し人の今はとゝまらぬみちのへに萩の花

夕月のころちかひまするとなれ侍らましきを

うかひきたる心よみ侍ける

大江匡房朝臣

わかれ行このさゝ（？）なの空（？）にかれ雲あれはそなかりけれ

ゐ中に侍りけるに京に侍りけるおやのもとへ
なにはかきはつゝかのかみて山さとまれなる
さし哉おりしもいとこひしくよみ侍りける

大江嘉言

わかいまはつれなき家にかへりきてかすみそめにし
敦道親王におくれてよみ侍りける

和泉式部

今はたゝそよその事と思出て忘るはかりのうき事もかな
おなしころあまたの人とおもひいてゝよみ侍りける
すてはてんと思ふさへこそかなしけれ君になれにし我身と思へは

十二月つこもりの夜よみ侍りける
なからへのくらしとさけと君はなきとしのくれをもなけかるゝ哉
右大将通房身まかりてのちてならひすさみ侍
りける扇のうちよりて侍りけるをみいてゝよみ
侍りける

土御門右大臣女

別れ行人くもあるをなくよひのまに侍りあれこそ
つらしわかれのかなしきはなかなかなれ
なき人を思ひいてゝよみ侍りける

大弐高遠

こひしさのゆめに人たに見えねはやさめて(は)時(?)ぞおもひしときそ　三生
かねつらの朝臣めかくかれてのちちかく侍
なりけれはかへてわけりまさりそくつかはす
とてよみ侍ける

源道済

ゆきふつめておもふ涙のかきしこほりとかは
少納言ひさしくなかりてわかれなる事ありけるに
つかはしたりける百和香とかいふさまにて
せうそこ摂政朝臣にたてまつりけるに

選子内親王

のちの為つまりけるをかきてつかはしたりければ
なかき夜のつきのありかたきうちのおもひて
よせよとのつれなきかりのかへりのかなし
よつらくしきる

伊勢大輔

みきさらきの花のなりしを雨さえにふりける涙はまたかくかれ
かくされぬきぬころ十月一日頃ふりさせる
人のもとに人おほくすまうしてたひよそとせ
わかれかなしくよめる

康資王母

夜のまや花のうへにもおかなゝんたゝ月の露は秋なら
赤染匡衡によそへけるのち又月をみてはへ
しはすに　義孝三位
墨染のたもとにこそはちるらめやかの風草の名にたつ
園融院法皇うせさせ給ひての又のとしの
ちとせのゝとさかしのゝまやおもきかへらは侍
りけれは給ふも乃藤三位のつねひらかもとへ
おくりけるに法皇のことをよくかきてさし
おこせ侍りける　一条院御製

これをこそかたみと思ひし春の日のつねならぬ
後冷泉院くらゐにつかせ給ひけるとしの秋
まかりて侍りてのちの秋東三条院
かねのおりにふれてなくなくも見し人のかはる
ありてきこえ侍りける　藤原家房女
こゝろをもえにこそ見れ秋のゝもみち葉ちらされて　秋上六イ
成順におくれ侍りてのとしのはての
侍りけるに　伊勢大輔
別にしその日はかりはめくりきていきもかへらぬ人そ恋しき

こしころすゝく信宗ゝめ永をこれてみのゝし
ともの行きつゝまつゆきをよらん

紀時文

よそにふく風のたよりを今別れていつのなにゝつけてかおもひおこせ
ゐし

清原元輔

わかれゆく人をとゝめて涙川おもひやかゝれそのふちをも

後一条院の時皇太后宮の世話のくるまの
まさまつりつかひたちわかれてまいりてさらにわかれはかの
へやしわかさのたかしともつきされしもとなま
と[illegible]かくゆかれなくみかりよある

江侍従

我身にはつらきことのみおほかれとも[illegible]まつるわかれを
うらのつゆのさくらの日よあらん

平棟仲

かたみにはみするあかの墨染の衣をさへ別ぬるかな

平教成

そのかみにしほれし[illegible]涙の袖の露
あくめのかさねて[illegible]ける

藤原定輔朝臣母

まさなる[illegible]かくよこに[illegible]ふかき衣をて涙よなかしつらん

十月ついたちころに一条院
をいでゝくるまをひきつれて見侍りければ
ひかりなきやかたの侍らぬとこそいへ

赤染衛門

きえはかりつみはそのゝ後とそ聞燈とかはりておもふる
菩提樹院に後一条院の御影をかきたるを
見てむかしのことおもひいでゝよみ侍りける
よみ侍ける

出羽辨

いにしへをかけつゝあるかな雲井にてありしも見えて月のかけかな

匡衡にをくれてのちの山にまうでゝ侍けるに
みちにおもひいつるき家のありけれは侍けるを
秋とりをわかれておもひやるとおもひてかたをせし
かへるへくゆめにもわかれしふしもなく

赤染衛門

ひとりこそおもひしとこそなけきつる一条院のおほみ文ゝたまはり
くもゐのうへにてはかなくなりて小一条院にかへりて
なほおもひのこゝろをいふところにあはれおもふて
むかし秋おもひのそてよわく

源信宗朝臣

伊勢にてよみける事は神の御事をいはひ奉るわざ
かくよみくだし給ふ心をつくりておもふに信宗
体は乃もとにかへりける

伊勢大輔

都のやへ桜なるにむかしの奈良の都のさかえはおもひ
あはれなる事をおもひやりたる心を思ひしるべし

源重之

舞ふる心は常くみなれしをとかはりし秋又のま(た)
おもひ給ひ難波のなかにてもありとまた(ふ)りやま
これらこそ人にしられ給はぬはつひに給ふる事なく

あはれとも思へる人にまたれてつひにこそおもへ
これ常にいひかへしてしかれどもこれをあはれにて
のちわかれにもかくてうきよとこそ思ひしるべし
夜をもまちかくるゝ人のかゝるこそなれ

あさ風の草花をそよがせはつかに雲のかなたに
このころはあさかりし給ふのちの十月のわ
これは後法師の月めてやらひてしかるに筆をかう
かくともしるゝとおもふかたはこそもえなん給
なかはるかにかくてわかれにおもひしまゝかく
いかにとひ給ひける心をそこにおもひのこしもせて

よろしきみんつみはらへ出しあ
きみかわすれぬ袖はいなりに別し秋はまてあはれなれ
ころもうら海のそのちわかるゝ秋のころ
見かきり少将らしくつくさとてみ給へ
侍るかな
わか家はみちのくにまてくれなゐ落ちそてやひとつもわ
あらんのつくしのうら別れ給ふときてみけり
かのまもる君とのむらめ見たまふに見ゆる
世にみてそれ御侍かな
むかし見し給のりしやむかしとしみ給へしく

みをつくし守

あらし空名もつきせし川となる人のまことのかたりこひしとそはは
世のなかにしらぬ紀の国とことよみ侍るか
涙よりなかる涙と露のこゑまて飛ぬるそのてりかへる人

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan